



ダッカのスラムで、日本ベシックの技術を使って浄化した水「Cycloaqua」を配布。まずは首都圏でモニタリングを進め、今後のビジネス展開に向けて下地を作る

リキシャは市民の生活の足。車道を走るため、交通渋滞の原因に



散乱するごみのそばで遊ぶ子どもたち。衛生環境の悪さが感染症の拡大にもつながっている



バングラデシュ  
from **BANGLADESH**

## 共にビジネスの種を育てる

アジアの最貧国と言われるバングラデシュ。首都ダッカは車とリキシャに埋め尽くされ、そのそばには、貧しさと発展の狭間で生きる人々の姿がある。彼らを“パートナー”としてビジネスに挑む日本企業の取り組み取材した。



高台から望むダッカの街並み。高層ビルのすぐそばにスラムが広がっている

### 貧しさと喧騒が混在する街

空港に着くと、迎りはすっかり日が落ちていた。外に出ると、もわっと、なまぬるい空気に包まれる。ザワザワザワ……。どこからともなく集まってきた人の波に圧倒される。この独特の空気感は、旅の始まりを告げるサイン。今回の舞台は、アジアの最貧国として知られるバングラデシュだ。空港から市街地までは、スムーズにいわば車で20分程度。しかし、一度渋滞にはまってしまつたら抜け出せない。1時間は優に超えてしまう。成長の兆し。ともとれるが、それにしても首都ダッカの

渋滞は悪名高い。面積は日本の約4割、人口は1億5000万人以上。世界でもトップクラスの人口密度だ。しかし、この日は違った。どの車線を見てもガラガラなのだ。「今日はハルタルだからね。18時まで外出禁止だよ」。車に乗り込むと、ドライパーにさう声がかげられた。「ハルタル」。日本では聞き慣れない言葉だが、いわゆる反政府運動(ゼネスト)のこと。ハルタルの日は、公共の交通機関などあらゆる機能がストップする。この国の文化の一つなのだろうが、人々の生活や経済活動にはかなりの痛手だ。

街中に入ると、暗闇の中にそび

### 川崎市の企業が生んだ水の技術

え立つ高層ビルが見えた。しかし脇道に足を踏み入れると、複雑に路地が入り組み、少し歩くとバラック小屋が並ぶ。そこはスラムだ。発展の中にある貧困。まさにその絵が、半径500メートル以内に広がっていた。

翌朝、外に出ると、大通りは車やリキシャで埋まっていた。ハルタル明けは、いつも以上に交通事情が悪化する。とにかく車が動かない。数十メートル先まで移動するのも一苦労だ。宿泊先からほど近い、コリアル・スラムまで30分以上も要してしま



ペダルをこいで水をくみ上げ、後部車輪に装着したフィルターを通して浄化。八千代エンジニアリングの杉田昌也さん(左から2人目)は、「勝浦さんのような決断の早さが途上国でのビジネスでは重要」と話す

彼らはスラムでの衛生教育にも力を入れる。  
足かけ2年、1カ月に一度のペイスで現地に足を運んできた勝浦さん。「最初のころは、空気は汚いし、ごみは多いし嫌だなあと思っていたのですが、だんだん愛着がわいてくるから不思議ですね」と笑う。4月にはついに、水販売の許可がバングラデシュ政府から



浄化した水は隣の部屋でボトル詰め。白衣とマスクの着用を徹底するなど、スタッフの衛生管理にも注意を払う

そんな雪国みたいだとバングラデシュ。一見何のつながりもないように見えるが、ゼロからモノを生み出すのがビジネス。その仕掛け人が、上席執行役員の佐竹右行さんだ。きっかけは2010年、佐竹さんがプライベートでこの国を訪れた時。貧困に直面する人々

### あなたの家のもやしが生産できる!?

そしてもう一社、この国で革新的なビジネスを起そうとしている企業がある。株式会社雪国みたい。キノコ類やもやしなどを販売する、日本では知る人ぞ知るトップブランドだ。

下りた。待ちに待った瞬間。彼らの自転車は今、真っ白なスタートラインに立った。



スラムの住民たちに聞き取り調査をする勝浦さん(左端)。貧困層の真のニーズを探る

そこに一台の軽トラックが、スロットと入ってきた。荷台には水の入ったペットボトルがぎっしりと積んである。人々は慣れた様子で、トラックの脇に並び始めた。  
「二人一本、順番にね」  
そう声をかけているのは日本人の男性、日本ペーシック株式会社勝浦雄一代表取締役。彼は今、この国で新たな挑戦を始めている。それが神奈川県川崎市のおフイスから生まれた同社の看板商品「シクロクリン(Cyclodrin)」を使ったBOPビジネスだ。「簡単に言うと、自転車をこいで水を浄化するシステム。日本では災害時に備えて、自治体やマンションの管理組合などに販売しています」。一台55万円。決して安くはないが、川でも貯水槽でも、水源さえあれば自転車駆付け、その場でこいで、きれいな水ができる。

大学卒業後、民間企業で浄水器の営業を担当していた勝浦さん。阪神・淡路大震災の時、水道管が破裂して水があふれ、多くの人が水に困っている映像に言葉を失った。自分は水にかかわる仕事をしたい。自分に何もできないと。持ち運びが簡単で、すぐにきれいな水を作る方法はないのか。そう考えていたところ、ある企業から「自転車をこいで浄水」のアイデアを売り込まれる。これだ!と思ったものの、当時は事業化に至らず。定年退職後、その夢を携えて起業した。  
そしてその舞台は、さらに開発途上国へ。「シクロクリンで安全な水を得ることが難しい国々の役に立ちたい。日本のNGOを通じてミャンマーの医療施設などに送ると、現地から感謝の声が寄せられ、その効果を実感。そして、次に目を付けたのがバングラデシュだった。

「料理に使うのも飲むのも川の水。子どもがしょっちゅう病気になるってしょうの。きれいな水があったら買いたいわ」。4リットル30タカ(約40円)。5人家族のアミナさんは、それなら

勝浦さんは開発コンサルタントの八千代エンジニアリング株式会社とタッグを組

の姿を目の当たりにしながら、ビジネスマンの「直感」だろうが、この国に「ビジネスチャンス」を見いだした。  
そして、彼がインスピレーションを感じたのが「もやし」だ。「もやしの原料である緑豆は、日本では9割以上が中国産。日本で安定供給するために、新たに栽培地を開拓する必要があります」。この緑豆、実はこの国では豆カレの具材としておなじみ。まだまだ生産量を増やすポテンシャルはある。緑豆栽培を通じて貧困に苦しむ農民の雇用を創出し、その約6割をもやしの原料として日本に輸出。残りの約4割は安価に現地の人々に提供する。このアイデアをグラミン銀行創設者のムハマド・ユヌス氏に持ち込んだところ、答えは「This is perfect」。グラミングループとの共同事業が始まった。  
対象は、北部、西部、南部の3地域。農家への説明から技術指導、フォローアップまで、佐竹さん率いるチームが念入りに行う。「現地スタッフが各農家を回り、種まき方から肥料や水のやり方、生育状況まで細かくチェックします。情報はすべてデータ化し、ICTシステムなども活用しながら把握できるようにしています」。  
そんな努力が「緑豆」として実り、昨年は約8000人の雇用を

み、スラムでニーズ調査を進めているところだ。

### 自転車をこいできれいな水を作り出す

市街地の北の外れ、日本ペーシックが拠点とする工場に足を運んでみると、8畳くらいのスペースに自転車2台並べて置かれていた。これが、自転車一体型浄水装置「シクロクリン」。スラムで配っている水は、現在、この2台で試験的に製造されている。それを懸命にこいでいるのが、2人の男性だ。「15分ごとに交替しながらの作業。なかなか体力がいるんですけど」と、笑いながら顔を見合わせる。ペダルをこくと、地下からくみ上げた水が、あつという間に透明な飲み水に。1時間一台あたり350リットルの計算だ。

「プチッ。突然、電気が消えた。」停電はしょっちゅうですが、自転車なら電気なしでも動く。ほらこやってね。そう言いながら、得意げにこぎ続ける。

現場でのパートナーは、プロジェクトマネジャーのモルシエドさんと調査員のラーマンさん。現地で暮らす彼らならではの視点が加わり、勝浦さん率いる「自転車チーム」は最強だ。「水を買ってもらうためには、なぜそれが必要なかを理解してもらわないと」。



緑豆は約65日で収穫できるため、乾期の圃場を有効活用できる

生み出し、約15000トンもの収穫があった。そしてついに昨年末、第一弾となる約230トンが日本に到着。早ければ今年の夏にも、両国の国旗がパッケージに描かれたもやしが生産される。日本と並ぶ予定だ。「日本とバングラデシュが、win-winの関係であることが絶対条件。常に先を見据えたビジネスです」と佐竹さんは意気込む。  
日本企業の挑戦が、この国をどう変えていくのか。日本人の知恵と努力が、バングラデシュで新たなうねりを生み出そうとしている。